

社会のつながりのうらおもて

—新型コロナウイルス感染拡大の実態調査とグローバルな対立への教訓—

概要

私たちは、つらい時に仲間とつながり元気をもらう事があります。しかし仲間意識は過度になるとグループ間の対立をひき起こす事もあります。この様な社会の絆(きずな)の2面性は、これまで繰り返し指摘されていますが、コロナ禍での実態は、まだよくわかっていません。京都大学大学院医学研究科 鄭志誠 研究員と同研究科 藤野純也 博士課程学生（現・東京医科歯科大学 講師）は、社会の絆や共感という一見ポジティブとみなされやすい概念の両面を、分析的レビューと質的調査によりコロナ禍の体験と関連づけ、認知の柔軟性という解決法を提示し、集団間の対立等の一般的な社会問題への提言を行いました。

分析の結果、人々のつながりを大切にする態度や共感を伴う表現はソーシャルメディア等を通じて孤独感を和らげる一方、同調圧力によりうわさや中傷を恐れたり、自分とは異なるグループに対する偏見（例：非ワクチン接種者）や攻撃的行動とも関連しうることが示唆されました。そしてコロナ禍の様子、刻々と状況が変わる様な場面では、特定の思いに固執せず、色々な視点で柔軟に出来事を理解する傾向の人々の方が、対立や葛藤に対してより適応的な傾向も示されました（図1）。心身の疲弊や社会の混乱が長期化し、コミュニケーションのスタイルも変化している中、本研究の結果は、人との関わり方をみつめなおし、現在世界的にも広がる不安定な社会情勢をよりよく理解する上でも有用なヒントとなる事が期待されます。

本研究成果は、2022年6月24日（現地時刻）に国際学術雑誌「Nature Humanities and Social Sciences Communications」に掲載されました。

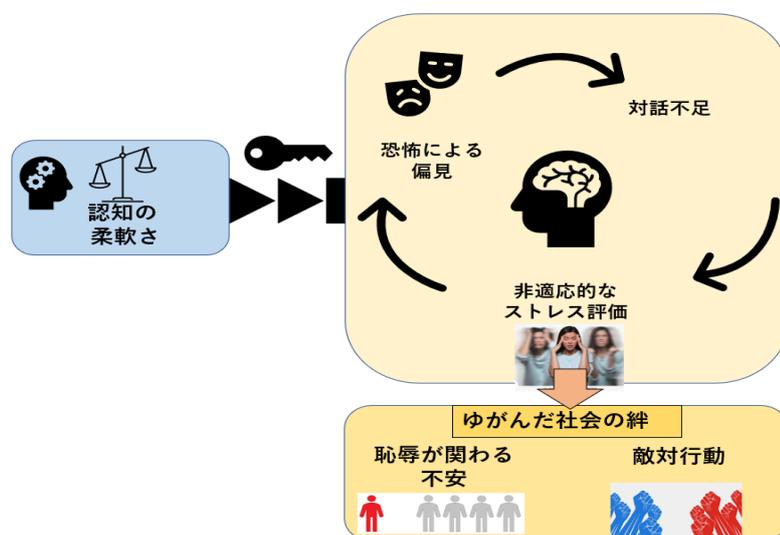


図1. 社会的絆に関わる負のスパイラルと、これを低減する認知の柔軟性の説明モデル

恐怖、偏見、対話不足は、集団間の対立を助長したり不安を増強する。一方様々な視点で柔軟に出来事を理解する傾向の人々の方が、これらの負の要因を減弱させる

1. 背景

私たちは、家族、友人、仲間たちと共に生活しています。そして、お互いを思いあい（共感）、つながりや信頼を深めたりして、健全な社会をつくる役割を果たしています。しかし私たちは時に仲間意識を過度に高め、自分とは外見や価値観などが異なる集団に対し、偏見や敵対心をもつ事もあります。この様な社会の絆や共感の2面性（もろ刃の剣）は、心理・哲学・社会学等の分野で繰り返し指摘されているものの、その背景にある心のしくみやコロナ禍での実態（出来事や体験）については、まだ十分に理解されていません。

2. 研究手法・成果

私たちは、社会の絆や共感という、一般的には望ましいとされる概念の両面を分析的文献レビューと質的調査によりコロナ禍の実態と関連づけ、さらに認知の柔軟性に関わる最近の研究を調査しました。

これらの結果、人々のつながりを大事にする態度や共感的な表現は、様々な文化圏の報告においてソーシャルメディア等を通じて、孤独感を和らげたり、苦境を分かち合ったりして、社会の絆を高めていました。しかし、その一方で人々とのつながりは、同調圧力という形で、うわさや中傷を恐れたり、過剰に自分の状態（例えば陽性者やアジア人の外見）を恥じる様なネガティブな事柄とも関連しうる事が認められました（図2）。さらに違反者を罰する様な自警行為（例：夜間営業店の通報）、または自分とは異なるグループ（例：非ワクチン接種者、運送/医療従事者、あるいは別の政党支持者）への偏見や攻撃的行動とも関わる事も示されました。



図2 同調圧力とゆがむ共感（相手にどう思われるか・相手をどう思うか）、それに伴う不安や攻撃性のイメージ

この様にコロナ禍の体験でも、人々のつながりを支える「共感」が、ネガティブな方向にも働いていたと考えられます。ここでは過度に相手にどう思われるかを心配し、同調圧力が増強したと思われる事例が多くありました。さらに同調圧力は、正義感や公平な判断をゆがめ、人々の対立を引き起こしうると考えられています。コロナ禍では、これらが顕著に表れたとも考えられます。例えば、偏見や世論が作り出す恐怖から、安易に誰かを仲間外れにしたり、又は敵とみなしたりして(つまりラベリング/評価)、社会の混乱を深めた事を示す報告も多くありました。

そしてコロナ禍の様に、直面する深刻な出来事が刻々と変わる状況では、特定の考えにこだわらずに、様々な立場（視点）で、しなやかに現状を理解しようとする傾向の人々の方が、対立や葛藤に対して、より適応的な傾向も示されました。ここでは、視点や注意を柔軟に切替え、状況/文脈理解を深める事が順応に大事な事である可能性も示しています(図3)。

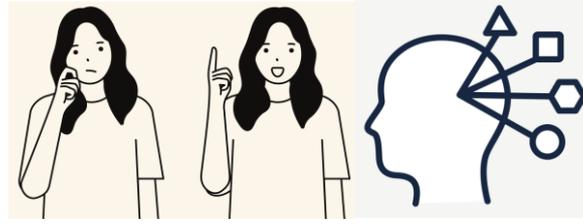


図3 新たな視点への気づきと柔軟な思考

このような認知の柔軟さは、他人への偏見の低さ、あるいはソーシャルメディア等での安易な同調の低さ、そして情報をうのみにしない傾向（情報の慎重な選択）とも関わっていました。

今後も、なりゆきを予測できない不安やストレスが社会規模で起こる場合、私たちは、物事を見る視点が柔軟に切替わりにくくなり、変化していく状況への想像力や寛容さが不足し、攻撃的（または自虐的）な行動をとってしまう可能性も考えられます。なおこれらの考えが教訓となり、より大きな対立集団への偏見の軽減や、対話の促進につながるかについては、さらなる実験や研究などでの検証が必要です。

かつて東日本大震災が起きた2011年には、その年を象徴する漢字として「絆」が清水寺で発表されました。人々の連帯の大切さは最近のラグビーワールドカップや東京オリンピックの「ワンチーム」や「団結」にもみられる様に繰り返し叫ばれています。そして新型コロナウイルス感染拡大の際にも絆が注目されました。しかし「絆」という漢字には、きずな（=大切な結びつき）と、ほだし（=心や行動の自由を縛る）という読み方がある様に、日本においても古くからその2面性が表現されていました。今回の調査により、絆がもたらす負の側面は、大規模な社会変化や不安を伴う様な状況下では、さらに増強/複雑化する事が明らかとなりました。

3. 波及効果、今後の予定

本研究では、人々の絆や共感が社会にもたらしうる負の側面について、新型コロナウイルスの感染拡大の実態に照らし合わせ、新たな知見を得る事ができました。このようなCOVID-19が引金となった恐怖、偏見、共感、社会のゆがんだ結束や敵対構造、そしてこれらを低減しうる認知の柔軟性に関わる知見は、政治、経済、歴史的背景的など多様な要因に関わる昨今の不安定な社会情勢をとらえる上でも、一つの手がかりとなりうる事が期待されます。

柔軟な思考や対話がグループ間の敵対心を和らげうる事は、既に最近の集団心理学や認知科学で議論されています。これまでの研究では、経済ゲーム等を用いて個人が、他民族の人々にどの様なふるまいをするかについて多くの研究が行われてきました。これらの先行研究では、個人の柔軟な意思決定が集団間の対立を緩和しうるとも考えられています。しかし国家などの、より大きな主体における柔軟性に対しては、実データによる精査等が必要です。今後は本調査を進展させ、集団間での絆や共感、そして柔軟で適応的な認識への介入が、人道的な意識を育むのか等も調べていきたいと考えています。

絆や共感を育む事は生きる喜びや自己犠牲(利他)的行動を生み出す反面、過度な連帯意識は集団内での束縛や集団間の暴徒などを助長する事が指摘されています。人々の共感を介して情報がセンセーショナルに拡大する事で、アグレッシブな世論が作り上げられてしまう危険性は、今回の感染拡大にとどまらず危惧すべき点とも考えられます。例えば、今後何かの大規模災害などがきっかけとなり、これまでの「当たり前」としてとらえられている常識やルール等に賛同する多数派が少なくなり、今までとは異なる多数派や、新たな同調圧力/対立（〇〇ハラメント等）が起こる事も考えられます。

心身の疲弊や社会混乱の影響が長期化し、人との関わり方やコミュニケーションのスタイルが変化している

中、現在でも多くの方が刻々とアップデートされる新常識(ニューノーマル)の中で、人とのつながりを模索していると思います。そして苦難に対して共に向き合う意識が世界的にも必要となっています。私たちが社会の絆や共感のもつ2面性を、しっかり自覚する事が大切なのかもしれません。これまで仲間だった家族や友人達を、ある出来事を境に、自分とは違う（あるいは敵）と安易に白黒をつけず、色々な視点（考え方）に気づきながら相手を理解し、寛容さを保つ事が肝となるのかもしれません。

4. 研究プロジェクトについて

本研究は、日本学術振興会から科研費の支援を受けて実施されました（21K07544 研究代表 鄭志誠；20K16654 研究代表 藤野純也）。

<研究者のコメント>

調査を通じて、私たちは仲間意識や思いやりを大事にする中でも、いつの間にか色々な意味で誰かを疎外・敵対しうるのだなと実感しました。私たち一人一人の心の持ちようが、少なからず現在の社会・世界の状況に影響しうるのではないかと、いう事を世間に伝えたいです。簡単にゆがむ他者の絆と共感、そしてこれらを補正しうる、心のしなやかさの理論は、これまで認知神経科学の実験などを通じて若干学んでいましたが、この実態を新型コロナウイルス感染拡大下の体験報告や学術論文を介して垣間見る事ができました。最後にこの知見が少しでも現在のグローバル化した不安定な社会情勢の理解の一助になる事を祈念しています（鄭志誠）。

<論文タイトルと著者>

タイトル：Social ties、fears and bias during the COVID-19 pandemic: Fragile and flexible mindsets
(新型コロナウイルス感染拡大下の社会的絆、恐怖、偏見：もろい思考と柔軟な思考)

著者：鄭志誠 藤野純也

掲載誌：Nature Humanities and Social Sciences Communications

DOI：https://doi.org/10.1057/s41599-022-01210-8